

学生企画ツアーによるインバウンド観光発展の可能性

Possibility to Develop Inbound Tourism from Student Tour Plans

朝水 宗彦

山口大学経済学部

Munehiko Asamizu

Faculty of Economics, Yamaguchi University

要旨

本論は、ボランティア等の活動を通し、学生による様々な社会貢献について、文献と簡易な現地調査によって概観したものである。山口大学の場合、学生の学外での活動に対してサポートの歴史が長く、学生の活動内容も時代と共に変化してきている。学生の課外活動は単に変化しているだけでなく、次第に複合化し、高度化を遂げている。山口大学における学生による社会貢献の一例として、本論では2019年度に実施されたインバウンド対応企画である「Mini Bus Tour」について紹介するが、従来型の異文化交流ツアーやモニターツアーよりも企画段階で良く練りあげられており、今後の継続次第では社会的・経済的な貢献も期待できる。

キーワード

モニターツアー、留学生、学生ボランティア

1. はじめに

ボランティア活動などを通し、学生が社会に貢献する機会はたくさんあるが、学生による社会貢献は時代と共に変化してきたと思われる。そのため、本論の前半では歴史的な背景を理解するため、様々な大学における学生ボランティアについて新旧様々な文献を集め、分野別に概観する。次に、山口大学における学生の自主活動のなかで、「Mini Bus Tour」の事例を取り上げ、学生による企画が良い意味で社会に及ぼす可能性について考える。「Mini Bus Tour」は日本人学生と留学生との混成チームで実施されているが、異文化交流だけでなく、インバウンド観光推進のためのモニター調査の意味合いもあるので、簡易なアンケート調査を用いながら今後の山口におけるインバウンド化の可能性について考えたい。

2. 学生ボランティアに関する先行研究

2.1. ボランティア活動と大学生

1995年はいわゆる「ボランティア元年」と言われる年である。もちろんそれ以前からボランティアの活動はあったが、同年1月の阪神淡路大震災では、延べ167万人のボランティアが活躍したとされる（神戸新聞NEXT2020: Web）。その後、2011年3月の東日本大震災や2016年4月の熊本地震でも災害ボランティアが活躍した。

災害ボランティアの中には大学生も見られ、その活動に関する報告も少なくない。北川ほか（1996）は、阪神淡路大震災直後の近畿大学における工学系学生の震災ボランティア活動について概説している。同大学で計画中だった「社会奉仕実習」を前倒して実施したものであり、カリキュラムの一環として位置づけられている。市川（2016）は、東日本大震災の復興のため、岩手県大槌町にて活動した学生ボランティアについて取り上げている。事例として大学生による、地元の子供の支援について述べられている。高木（2017）は、2016年の熊本地震における避難所での、「おひさまカフェ」の学生ボランティアの活動について報告している。

2.2. 教育に関するボランティア

現在、学生によるボランティアには様々な形態がある。なかでも、大学は高等教育機関であることから、学生の専門知識を生かした、教育に関連したボランティアが数多く見られる。浮田ほか（2015）は、徳島大学の学生が地元の小学生向けのロボット・プログラミング教育を継続して実施している事例を紹介している。佐々木・福島（2015）は、中国学園大学の学生による、地元の小学生を対象とした天文教室について述べている。濱谷（2012）は、北海道工業大学と藤女子大学の学生が、「ていね夏あかり」のための提灯を地元の児童館や小学校などで作成・指導・設営を行っている事例を紹介している。

なお、ボランティアは本来自主的に行うものであると

思うが、大学の正課活動として「自主的」に行われる学生の活動もある。近年、大学の授業の一環として、課題解決型の学習であるPBL (Project / Problem Based Learning) を導入し、学外で学生が活動を行うことも増えてきた。今井ほか(2010)は、福井大学におけるPBLの一環として、学生による「夏越の灯り」やクリスマスのイルミネーションに関する実践教育について報告している。中島・井口(2013)は、同志社大学のPBLの一環として近江八幡市に学生を派遣し、大学教育と地域づくりの融合を試みている諸事例を挙げている。朝倉・廻(2015)は、PBLの手法を用い、学生の視点から、川越市に若者を誘客する方法を考えるプロセスを紹介している。

2.3. 異文化交流と学生ボランティア

次に、異文化交流や異文化教育に関するボランティアも少なからず挙げられる。異文化教育に関連するものとして、三浦ほか(1999)は、勤務先の金沢大学の留学生に対する日本人学生の日本語ボランティアが、留学生、日本人学生双方の交流や学習に貢献していることを述べている。西谷(2000)は、日本語教員養成課程のある大学の日本人学生が、留学生の多い他大学へ日本語ボランティアとして参加する、大学の枠を超えたケースを紹介している。

これらの日本人学生による教育的なボランティア活動は、日本に居住する外国人の多様化に伴い、留学生以外にも拡大している。中島(2007)は、いわゆる「ニューカマー」と呼ばれる、従来の在日外国人とは異なる人々に注目し、愛知県に居住する外国人児童に対する日本人学生の学習ボランティアについて報告している。市川(2011)は、某大学における外国につながる子ども達の学習支援と文化交流を行う学生ボランティアグループの活動について事例を紹介している。

なお、近年の日本の大学における英語学位コースの急増に伴い、日本語が分からない、あるいは日本語能力が極めて限定された留学生が増えている。そのため、留学生に対する日本人のボランティアの役割も変化している。久保田・鈴木(2015)は、英語で日本理解教育を行っている日本の大学に注目し、アメリカやイギリスなど、英語圏からの交換留学生向けの入門的な日本語会話授業での日本人ボランティアの活動について紹介している。

2.4. 地域おこしと学生ボランティア

2020年のコロナ禍では、リモートワークや地方移住が注目されるようになった。しかし、それまでは、東京一極集中に対し、地方における人口減少や高齢化、産業の衰退などは長年大きな課題であった。そのため、地方大学が地元社会の活性化に貢献できるような様々な取り組みが行われており、学生ボランティアを活用しているものも少なくない。たとえば、清原(2006)は、兵庫県立

大学の学生が、地元を良く理解するため、「再発見上郡ウォークラリー」の企画・運営を行っている事例を紹介している。内藤(2016)は、宇都宮共和大学の学生によって組織された、「宇都宮まちづくりお助け隊」による菊水祭への山車参加支援について述べている。

学生の活動によって、使われなくなった古い建物が新たな拠点となることもある。蓮見(2011)は、つくばにて、筑波大学の学生が使われていなかった蔵を再利用するプロジェクトから、定期市を開催するようになった事例を報告している。山本ほか(2012)は、山口県内の古民家が都市農村交流施設として再利用されるまで、その整備において学生ボランティアが活躍した事例を紹介している。このような学生の活動が広域化する場合も見られる。遠藤(2007)は、東京大学の学生が岩手県大野村で使われていなかった米蔵を再開発し、周辺地域を包括した「大野夢市」に発展した事例について述べている。

さらに、学生の活動が長期化し、発展する場合もある。熊谷(2009)は、北里大学の学生が陸前高田のキャンパスの10周年記念に実施した企画展が博物館の設立に至った事例を紹介している。大嶋(2018, 2019a, 2019b)は、一連の研究のなかで、長期的な視点での学生の活動について分析している。つまり、初期段階にとにかく学生に地元の観光地を知ってもらうことやベンチマークになる観光地調査を行うことから始め(大嶋2018)、学生グループ内で活動が盛んな学生とそうでない学生に分化しがちなところを調整し(大嶋2019a)、課題解決型のPBLは学生の主体性といっても、プロジェクトが継続して軌道に乗るまで、教員ファシリテート力が求められる(大嶋2019b)ことを述べている。

学生による地域貢献について、個々の事例だけでなく、よりマクロ的に分析した研究もある。中川(2019)は、地方の国立大学における「地域○○学部」の設立ブームや2013年に開始された文部科学省によるCOC+事業(Center of Community: 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業)の推進など、マクロ的な政策面の視点から、大学生のキャンパス外活動について考察している。

3. 山口大学における学生ボランティアとPBL

3.1. おもしろプロジェクトと自主活動ルーム

山口大学には、学生が授業以外にも自主的に活動を行うためのサポート体制が整備されている。たとえば、山口大学では、学生の自主的な活動を援助するため、1996年に「おもしろプロジェクト」による資金助成が開始された(辻2009: 61)。さらに、おもしろプロジェクトによる教育活動が2005年に文部科学省の特色ある大学教育プログラム(特色GP: Good Practice)に選定され、その予算を基に2006年4月に自主活動ルームが設立された(辻2010: 48)。自主活動ルームには専門の教員と職員が常駐し、ボランティアやその他の社会貢献などの学生による活動をサポートしている。

辻(2009:62)が2005、2006、2007年度のおもしろプロジェクト報告会に参加した学生に対して実施したアンケート調査(n=37)によると、「かけがえのない体験」、「人格的成熟・自己確認」、「組織運営に関する学び」の点で参加学生から高く評価されている。さらに、辻(2020:47)が2018、2019年に行った、おもしろプロジェクト参加学生のアンケート調査(n=257)によると、「出会いと交流」、「自分を活かす力」、「驚き」に関するコンピテンシーが高く認識されている。

3.2. 就職支援部とキャリア教育

他方、2004年の国立大学法人化は学生への対応の点で大きな転換点になった。山口大学では法人化の前年の2003年に学生支援センターが設置され、その中に就職支援部が設置された(平尾2013:13)。2010年4月には山口県インターンシップ推進協議会が設立されたが、山口大学でも県内就職に向けた取り組みが強化された(平尾2013:18)。

さらに、2012年に文部科学省の「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」が実施され、山口大学も「中国・四国産業界の人材ニーズに対応した協働型人材育成事業」(高知大学が主幹校)に加わった(平尾2013:23)。同事業の一環として、2013年の「おもてなしプログラム」では、山口県内の地元大手の製菓業と共に、カフェの集客対策について取り組んだ(平尾・田中2015:32)。このように、キャリア教育の面でも、徐々にPBLが取り入れられるようになった。

3.3. やまぐち未来創生リーダーと観光

さらに、2015年から文部科学省COC+事業の一環として、山口大学を拠点校とした山口県内の大学による「やまぐち未来創生リーダー」(YFL:Yamaguchi Frontier Leader)育成プログラムが実施された。これは、山口県において、若者の卒業後の地元定着や企業が求める人材育成等を目指したものである(COC+2016:1)。YFLでは、たとえば1年生の時に山口県の各専門家からのオムニバス講義を受け、2年生の時に県内でボランティア活動やサービスラーニングを行い、3年生でPBL型のインターンシップを自治体や企業と実施する。

YFLのプログラムには、観光に関係するものも少なくない。たとえば、2016年には、山口県庁とYFL学生が全国都市緑化フェアの企画提案を行ったが、この企画の一部は2018年実施された「山口ゆめ花博」にて実施された(COC+2017:15)。2018年には、山口県庁とYFL学生とが共同で、インバウンド拡大に向けた観光モデルの提案に取り組んでいる(やまぐち未来創生人材育成・定着促進事業2018:Web)。

4. 山口大学における学生主催の留学生ツアー

さて、おもしろプロジェクトにて学生が実施した企画

のうち、筆者は2019年度の「Mini Bus Tour」について着目した。この企画は、先述の先行研究のカテゴリーで言えば、「2.3」の異文化交流に「2.4」の地域おこしの要素を組み込んだものである。つまり、日本人学生と留学生の間で異文化交流を楽しみながら、インバウンド観光の振興策を考えられ、その成果を実社会に還元できるという点でこの企画は高く評価できる。「Mini Bus Tour」は山口大学の学生(日本人や在日歴の長い留学生)が、(比較的新しく来日した)留学生を山口県内の観光地にバスで連れていくツアーであり、2019年11月4日(萩方面)と2020年1月25日(長門方面)に実施された。

さらに、この企画は、従来山口大学で実施してきた企画と比べても、いくつかの点で興味深い。まず、この企画が外部の団体や教員から依頼されたものでなく、学生の自主企画でありながら、山口県の将来的なインバウンド観光の振興策も組み込まれていることが挙げられる。今までのおもしろプロジェクトでも、日本人と留学生の異文化交流企画はいくつかあり、学生間の親睦のためのバスツアーも実施されてきた。日本の多くの大学のように、2015年に国際総合科学部が設置される前の山口大学は、留学生と日本人学生が接する機会はそれほど多くなかったため、交流を活性化させることは確かに重要ではある。しかし、「Mini Bus Tour」のように、親睦を図りながら県内の観光地を巡り、ツアー後に外国人の視点から山口県の観光の強みや弱みについて討論するのは、今後の山口県の観光のインバウンド化を進めるうえで、重要な基礎情報になる。

さらに、注目されることは、「Mini Bus Tour」のコースの選定が、日本人と留学生の共同作業で行われたことが挙げられる。筆者も仕事柄山口県内の地方自治体の依頼で、留学生をモニターツアーに動員することが多い。しかし、ほとんどの場合あらかじめコースが決められており、日本人にとってよく知られている観光地が外国人にどのように思われているのかということ进行调查することが多かった。しかし、元乃隅神社のように、日本人にあまり知られていなかった場所が、急に外国人に注目され、観光地としてブレイクする可能性もありうる。つまり、日本人だけが会議室でコースを考えるより、「Mini Bus Tour」のように、企画段階から留学生が参加したほうが、インバウンドのモニター調査を行うためには理にかなっている。

なお、筆者は元々「Mini Bus Tour」の存在を知らなかったが、1回目のツアーの報告会の時に2回目のツアーについて情報を得た。そして、プロジェクトのメンバーの学生と相談し、2回目のツアー(1月25日)の時に簡易なアンケート用紙を配布してもらった(巻末資料1)。

なお、このアンケートはサンプル数が少ない(n=16:日本人引率者3人を含む)ので、そのまま記載された内容を巻末に明記した(巻末資料2)。回答者のうち、留学

生の出身地は以下のとおりである (n=13: 図1)。

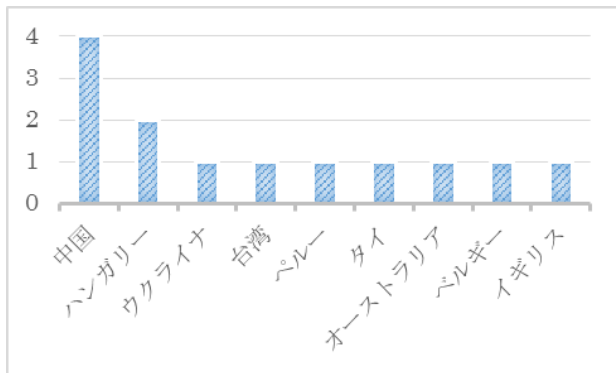


図1 留学生参加者の出身地 (単位: 人)

参加者の出身地を見ると、アンケートの対象者で中国出身者が多いのは、2019年(5月1日現在)の留学生431名のうち、中国人が180人で最も多いことが反映している(山口大学2020:9)。ただし、アジア圏以外の留学生の参加も少なくなく、様々な出身地の留学生がバランスよくツアーに加わっている。参加者の男女比は女性に偏っているが(図2)、筆者が同じようなモニターツアーを実施しても同様の結果になるので、これはよくあることである。

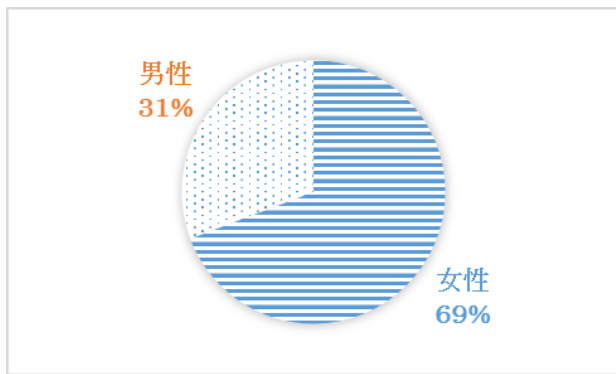


図2 留学生参加者の男女比 (n=13)

次に、質問と回答の内容をいくつか見ていきたい。まず、訪問して良かった場所であるが、「すべて良かった」や「元乃隅神社」の記載が多い(図3)。これは参加者が事前に行き先を話し合っていることや、2回目の訪問先のメインが元乃隅神社だったこともあり、このような結果になったのであろう。

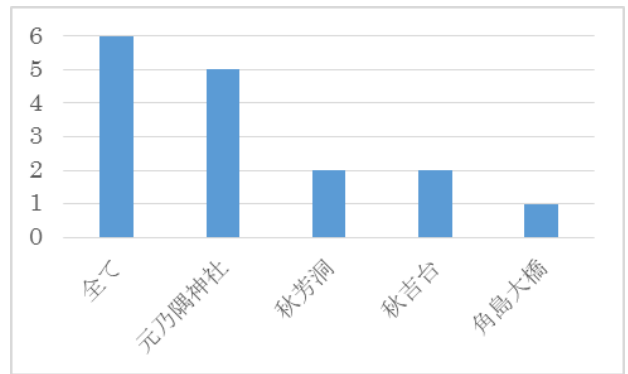


図3 訪問して良かった場所 (複数回答 単位: 人)

なお、今後行きたい場所は萩(1回目のツアーの訪問地)が多かったが、錦帯橋など岩国方面も少なからず見られる。岩国方面はツアーの企画段階で候補に挙がっていたが、1回目や2回目での訪問先に含まれていなかったためであろう(図4)。

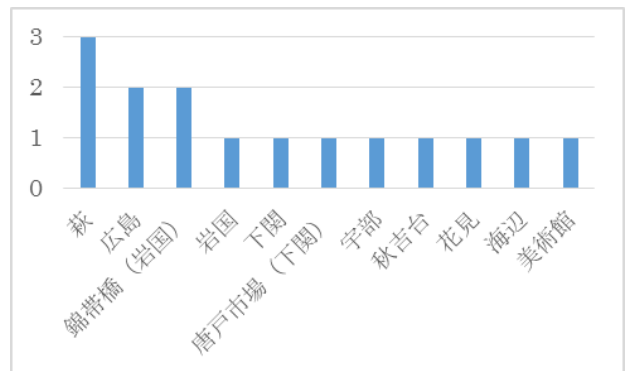


図4 次回行きたい場所 (複数回答 単位: 人)

なお、山口県の観光地に関する改善点として、公共交通機関が挙げられている(図5)。「Mini Bus Tour」ではバスを借り上げているが、個人で旅行を行う際には公共交通機関を使う場合が多いので、外国語での交通機関の案内を拡充することが重要である。

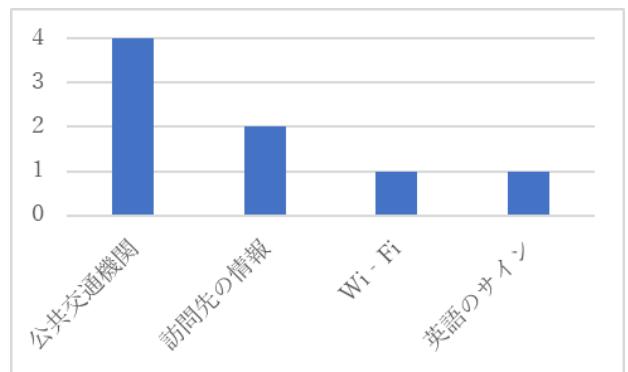


図5 山口県で外国人観光客のために必要な改善点 (複数回答 単位: 人)

ちなみに、このツアーは3回目以降も予定されていたが、新型コロナウイルスの影響を受け、残念ながら岩国方面へのツアーは実施されなかった。志半ばの状態であるため、コロナが落ち着いてから、継続してツアーが実施されることを期待したい。

5. おわりに

以上、学生のキャンパス外での活動について概観してきた。今まで述べた文献から分かるように、教育や異文化理解、地域おこしなど、各地で様々な活動が行われている。個々の学生の活動だけでなく、山口大学の場合、おもしろプロジェクトや自主活動ルームなど、学生の学外での活動に対して組織的なサポートの歴史が長く、活動の内容も徐々に高度化している。学生の活動の一例として「Mini Bus Tour」を挙げたが、異文化交流の要素や山口県のインバウンド観光を推進するためのPBLの要素が複合的に含まれており、なおかつ筆者が今まで実施してきた留学生によるモニターツアーよりも計画が良く練られている。あいにく新型コロナウイルスの影響で「Mini Bus Tour」は2回目で終わってしまったが、大規模な課外活動が再開されるようになったら、今後の学生の自主活動に期待したい。

【引用・参考文献】

- 朝倉はるみ・廻洋子, 2015, 「観光教育におけるPBLの試行と課題：川越市若者誘客事業を事例として」, 『国際経営・文化研究』, vol. 20(1), pp. 77-91.
- 市川享子, 2011, 「大学ボランティアセンターの機能に関する考察：外国につながる子ども達を支援する学生VGの立ち上げ支援事例」, 『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』 vol. 17, pp. 40-49.
- 市川享子, 2016, 「創造的リフレクションの生成過程に関する実証的研究」, 『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』 vol. 26, pp. 27-36.
- 今井一翔他, 2010, 「学生主体としたイルミネーション活動」, 『日本工学教育協会平成22年工学・工業教育研究講演会講演論文集』, pp. 120-121.
- 浮田浩行ほか, 2015, 「大学生主体の小中学生向けロボット教室「徳島ロボットプログラミングクラブ」における科学技術教育」, 『日本ロボット学会誌』, vol. 33(3), pp. 154-163.
- 遠藤新, 2007, 「まちづくり実験におけるコミュニケーションの諸相」, 『工学教育』, vol. 55(1), pp. 47-53.
- 大嶋淳俊, 2018, 「地域活性化と観光ビジネス－温泉地を一例に (I)：地域活性化リーダーの考察－」, 『いわき明星大学研究紀要 人文学・社会科学・情報学篇』, vol. 31(3), pp. 65-80.
- 大嶋淳俊, 2019a, 「地域活性化と観光ビジネス－温泉地を一例に (II)：地域連携型PBL教育の課題と展望－」, 『いわき明星大学研究紀要 人文学・社会科学・情報学篇』, vol. 32(4), pp. 28-42.
- 大嶋淳俊, 2019b, 「地域活性化と観光ビジネス－温泉地を一例に (III)：映像制作による地域連携型PBLの実践－」, 『いわき明星大学大学院人文学研究紀要』, no. 16, pp. 13-40.
- 北川博巳ほか, 1996, 「阪神大震災におけるボランティア派遣とその教育効果に関する研究」, 『土木計画学研究・論文集』, vol. 13, pp. 381-390.
- 清原正義, 2006, 「シンポジウム「地域と大学の連携」」, 『日本教育政策学会年報』, vol. 13, pp. 96-101.
- 久保田美映・鈴木理子, 2015, 「日本語ボランティア活動がグローバル人材育成につながる可能性」, 『Obirin Today』 2015, pp. 73-89.
- 熊谷賢, 2009, 「大学生が育てたミュージアム－北里大生と地域博物館の連携－」, 『日本生態学会誌』, vol. 59(1), pp. 99-103.
- 神戸新聞 NEXT, 2020, 「167万人が被災地へ」 <https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/p6.shtml>, 2020年7月28日閲覧
- 佐々木弘記・福島理恵, 2015, 「「子ども科学体験大学」における天体を題材とした講座プログラムの開発と実践」, 『日本科学教育学会研究会研究報告』, vol. 30(8), pp. 63-66.
- 高木亨, 2017, 「熊本地震からの復興とボランティア支援」, 『2017年度日本地理学会春季学術大会日本地理学会発表要旨集』, 100220
- 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業, 2016, 「平成27年度事業報告書」COC+
- 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業, 2017, 「平成28年度事業報告書」COC+
- 辻多聞, 2009, 「おもしろプロジェクトによる学びの成果と今後の課題」, 『大学教育』, vol. 6, pp. 61-72.
- 辻多聞, 2010, 「学生の自主的な活動支援部署の設立時の考慮事項：山口大学学生自主活動ルーム設立の事例をもとに」, 『大学教育』, vol. 7, pp. 47-56.
- 辻多聞, 2020, 「正課外活動参加者のキャリア育成状況：「山口大学おもしろプロジェクト」参加者による自己評価に基づいて」, 『大学教育』, vol. 17, pp. 43-54.
- 内藤英二, 2016, 「まちづくり活動の新展開～提案から実践へ 宇都宮まちづくりお助け隊の誕生～」, 『都市経済研究年報』, no. 16, pp. 147-152.
- 中川秀一, 2019, 「「関係人口」からみた大学教育における地域フィールドワーク」, 『経済地理学年報』, vol. 65(1), pp. 1-9.
- 中島智・井口貢, 2013, 「大学の観光教育におけるPBLの位置づけと活用：「共歓」という視座の可能性」, 『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』, no. 4, pp. 21-32.
- 中島葉子, 2007, 「ニューカマー教育支援のパラドックス」,

『教育社会学研究』, vol. 80, pp. 247-267.

西谷まり, 2000, 「日本語教員養成課程の学生による日本語ボランティア」, 『一橋大学留学生センター紀要』, vol. 3, pp. 109-116.

蓮見孝, 2011, 「地域再生デザインの実践」, 『デザイン学研究特集号』, vol. 19(1), 36-51.

濱谷雅弘, 2012, 「学生の地域貢献・交流の現場から見えてくる教育成果について」, 『日本工学教育協会平成24年度工学教育研究講演会講演論文集』 pp. 210-211.

平尾元彦, 2013, 「正課内外のキャリア教育: 山口大学学生支援センター10年の歩み」, 『大学教育』, vol. 10, pp. 13-24.

平尾元彦・田中久美子, 2015, 「山口大学における協働型インターンシップの取り組み」, 『大学教育』, vol. 12, pp. 28-37.

三浦香苗ほか, 1999, 「留学生と日本人ボランティア・チューターの能動的共同活動」, 『日本語教育方法研究会誌』, vol. 6(2), pp. 30-31.

山口大学, 2020, 『山口大学案内2020』, 山口大学

やまぐち未来創生人材育成・定着促進事業, 2018, 「インバウンド拡大に向けた観光モデルの提案/課題解決型インターンシップ (PBI)・山口県庁 (国際課)」
http://www.yamaguchi-u.ac.jp/coc-plus/_5139/_6529/_6993.html, 2020年7月30日閲覧

山本幸子ほか, 2012, 「中山間集落における空き家を活用した都市農村交流施設の整備プロセス」, 『日本建築学会計画系論文集』, vol. 77(676), pp. 1423-1430.

巻末資料1 質問項目

バスツアー アンケート (2020年1月25日)

Questioner for Bus tour (January 25, 2020)

名前 / Your Name

学部・研究科 / Name of Faculty or Graduate School

性別 / Sex

年齢 / Age

出身地 / Place of Birth

Q1. 訪問して良かった場所 / The good place to visit during this tour.

Q2. 訪問中あまり良くなかった場所 / The place you do not like during this tour.

Q3. このツアー中で良かった活動 / The good activity during this tour.

Q4. このツアー中であまり良くなかった活動 / The activity you do not like during this tour.

Q5. 次回訪問したい場所 / The place you would like to visit next time.

Q6. 次回やってみたい活動 / The activity you would like to try next time.

Q7. 山口県で外国人観光客のために必要な改善点 /
 Matters need to improve for international tourists in Yamaguchi Prefecture.

Q8. 自由記述欄(もしあれば) / Free comments (if you have)

巻末資料2 留学生ツアーの関係者の回答

留学生参加者

A: 国際、男性24、台湾

Q1 全部

Q2 なし

Q3 全部

Q4 なし

Q5 錦帯橋

Q6 無記入

Q7 無記入

Q8 ありがとうございます。ご苦勞様でした。

B: 国際、男性28、ウクライナ

Q1 Every place

Q2 無記入

Q3 Sightseeing

Q4 無記入

Q5 Hagi

Q6 Hiking

Q7 A little background story in the bus before arriving to each spot

Q8 Thank you very much.

C: 国際、女性26、中国

Q1 Every place

Q2 None

Q3 Sightseeing

Q4 None

Q5 Hagi

Q6 Hiking

Q7 Some information

Q8 I really appreciate the tour.

D: 国際、男性23、中国

Q1 元乃隅神社

Q2 なし

Q3 海辺の観光

Q4 秋芳洞の観光が少し長い

Q5 唐戸市場

Q6 船に乗りたい

Q7 初心者のためのバスやJRなどの案内

Q8 無記入

E: 国際、男性21、ペルー

Q1 Everything

Q2 Nothing

Q3 秋芳洞

Q4 無記入

Q5 Ube
 Q6 Zoo
 Q7 無記入
 Q8 無記入

F: 国際、女性22、タイ
 Q1 Every place
 Q2 無記入
 Q3 Free time at lunch
 Q4 無記入
 Q5 Akiyoshidai
 Q6 無記入
 Q7 More English sign
 Q8 More light in Akiyoshido

G: 国際、女性22、ハンガリー
 Q1 元乃隅神社、秋芳洞
 Q2 なし
 Q3 全部
 Q4 なし
 Q5 桜がきれいなところで花見、海辺、美術館
 Q6 日本の文化体験
 Q7 無記入
 Q8 無記入

H: 国際、女性22、中国
 Q1 角島大橋
 Q2 秋芳洞
 Q3 無記入
 Q4 無記入
 Q5 無記入
 Q6 無記入
 Q7 無記入
 Q8 バスに乗る時間が長いので、移動中に簡単なゲームをした方がよい

I: 国際、女性21、ハンガリー
 Q1 Motonosumi Shrine
 Q2 None
 Q3 Akiyoshi Cave
 Q4 None
 Q5 Shimonoseki, Hiroshima
 Q6 Something to do with eating
 Q7 無記入
 Q8 無記入

J: 国際、女性23、オーストラリア
 Q1 秋吉台、元乃隅神社
 Q2 なし
 Q3 秋吉台
 Q4 なし

Q5 岩国、広島
 Q6 考えていない
 Q7 公共交通機関
 Q8 無記入

K: 教育、女性22、ベルギー
 Q1 秋吉台、元乃隅神社
 Q2 無記入
 Q3 秋吉台
 Q4 無記入
 Q5 萩
 Q6 無記入
 Q7 観光場所までの交通機関
 Q8 無記入

L: 国際、女性22、中国
 Q1 秋芳洞
 Q2 なし
 Q3 一緒にご飯を食べたこと
 Q4 なし
 Q5 無記入
 Q6 無記入
 Q7 無記入
 Q8 無記入

M: 教育、女性20、イギリス
 Q1 All of it
 Q2 None
 Q3 All of it
 Q4 None - all was good
 Q5 ?
 Q6 ?
 Q7 Public transport, Wi-fi
 Q8 無記入

 日本人引率者

N: 経済、男性22、宮崎県
 Q1 元乃隅神社
 Q2 なし
 Q3 食事
 Q4 なし
 Q5 なし
 Q6 なし
 Q7 多言語の看板
 Q8 無記入

O: 経済、男性21、福岡県
 Q1 元乃隅神社
 Q2 なし

Q3 みんなでまとまって行動

Q4 ?

Q5 錦帯橋

Q6 おまかせ

Q7 交通網の整備

Q8 無記入

P: 理、男性20、愛知県

Q1 元乃隅神社

Q2 特になし

Q3 写真撮影

Q4 特になし

Q5 大正洞

Q6 日本語NGで山口ツアー

Q7 英語の看板を増やす。中途半端な説明ではダメ

Q8 無記入